

宣教活動から教会活動へ

太平洋諸島のキリスト教伝道史では、本国組織に管理された宣教活動から島中心の教会活動に移行する時期が一つの重要な転換点となる。ハワイの場合、ハワイ伝道協会 (HEA) が設立され、アメリカ海外伝道評議会 (ABCFM) の支援打ち切りに伴って独自の評議員会が設置された 1850 年代から 60 年代がその転換期であった。こうして 19 世紀後半は、ハワイ人牧師が徐々に各地の会衆派教会を監督するようになっていった。しかし、彼らは必ずしも協会内でリーダーシップを握ったわけではない。例えば、HEA の評議員会の主要メンバーは白人牧師が独占し続けたし、会衆派教会のオピニオン紙である「フレンド (*The Friend*)」の編集者 25 名のうちハワイ人は 1 名にすぎなかった。

ハワイ人牧師を中心としたハワイ人によるハワイ人のための教会活動、すなわち真の意味でのキリスト教の現地化が 19 世紀後半のハワイにおいて展開されにくかったのには、幾つかの理由が考えられる。まず第一に、白人牧師のハワイ人やハワイ文化に対する不当に低い評価とそれに基づく一種の温情主義的な態度が上げられよう。だが、意外なことに、ハワイ人一般信徒のハワイ人牧師に対する態度もキリスト教の現地化の障害となっていた。彼らは、それまで教会を指導していた白人牧師に代わってハワイ人牧師を受け入れることに積極的ではなかったのである。彼らの間では、白人牧師の方がハワイ人牧師よりも信望も威信もあったのだ。

社会変動と会衆派教会

会衆派教会は、19 世紀前半、好条件に恵まれてハワイ人社会の中で順調に勢力を拡大したが、19 世紀後半に入るとハワイ社会の様々な変化によって苦戦を強いられ、信徒数を減らすことになる。その第一の理由として考えられるのはハワイ人の人口変動だろう。19 世紀は外来の伝染病によってハワイ人の人口が激減した時代であった。1823 年に約 13.5 万人いたハワイ人は 50 年後の 1872 年には約 5.1 万人にまで減少し、19 世紀の終わりには混血を含めてもハワイ人は全人口の過半数を占めることができなくなっていた。また、19 世紀中頃の捕鯨業の隆盛が港町を発展させると、ハワイ人は田園部から港町へ流出したため、過疎化の進んだ田園部での教会運営が難しくなっていった。

しかし、1860 年代から 90 年代にかけてハワイ人の人口減少が 3 割程度であったのに対し、ハワイ人信徒は 8 割近くも減少したことを考えると、人口変動だけでは 19 世紀後半の会衆派ハワイ人信徒の減少を説明することはできないだろう。確かに 19 世紀後半のハワイ人の人口変動は会衆派教会の伝道活動に影響を及ぼした。同時期にハワイ人のカトリック信徒はほとんど減少せず、モルモン教徒は逆に 1.7 倍に増加していることを考えると他の要因を探る必要がある。

ハワイ人信徒数の激減は、会衆派白人牧師もよく自覚するところであり、彼らがその理由として上げたのは、カトリックとモルモン教の勢力拡大であった。本国組織から独立し、徐々にハワイ人牧師に教会活動を委ねるようになった会衆派に対し、カトリックとモルモン教では依然として比較的多くの「優秀な」白人宣教師がハワイ人を対象に伝道活動を展開していると彼らは考えたのである。また、19 世紀後半はサトウキビ産業

が捕鯨業に取って代わった時期であり、プランテーションの労働力としてやって来た中国人やポルトガル人との間に生まれた混血ハワイ人が他宗教・他宗派、さらには無宗教へと流れたことも考えられる。カトリックやモルモン教にとっても条件は同じであったが、本国組織からの支援がなくなり現地化の過程にあった会衆派教会は、人口変動や混血化の影響をより受けやすかったのかもしれない。

カフナの復興と英語の使用

現地人のキリスト教徒が土着の宗教に後戻りすることを背教 (backsliding) と呼ぶが、表立った背教行為でなくても、無意識のうちに伝統的信仰を保持するハワイ人信徒は存在した。この伝統的宗教文化を代表するのがカフナであり、19 世紀後半に会衆派教会が直面した最大の問題の一つが、カフナのハワイ人信徒への影響であった。カフナは、本来、特定分野の熟達者や専門家を意味する。それは司祭や呪術師などの宗教的職能者、治療師、職人などに分けられ、霊的世界と関係を持つ宗教的性の強い役職であった。

19 世紀後半は、それまでキリスト教教会によって抑圧されていたカフナが改めて社会の表舞台に現れた時代であった。1861 年、王国政府によって約 300 名のカフナに公式の免許が発行され、治療費についての規定が定められた。1886 年にはハワイ保険局が設置され、黒魔術の行為に及んだカフナの免許を剥奪する規則などが定められた。当時の政府は、医療専門家としてのカフナの確立を目指していたのである。しかし、このようなカフナの復興は、会衆派教会にとってキリスト教による文明化に逆行するものであった。彼らにとって医療専門家のカフナ (kahuna lā'au lapa'au) と黒魔術を行うカフナ (kahuna 'anā'anā) は、土着の神々を崇めるという点では何ら変わらぬ異教的存在であったからである。

ところで、19 世紀を通して見れば、会衆派教会のほとんどは宣教師がハワイ人のために設立したハワイ人教会であった。しかし、19 世紀末に向けてサトウキビ産業が急速に発展するとプランテーションに住む白人を対象とした英語礼拝が行われるようになり、英語会衆が形成され、やがて白人教会が設立されるようになる。また、中国、ポルトガル、日本からの移民を対象とした教会が設立され、HEA は多民族社会を反映した複数のエスニック教会から構成される組織へと変貌を遂げていった。

19 世紀末に向けて、ハワイ人若年層の使用言語も徐々にハワイ語から英語へと移行すると、ハワイ人教会内でも英語の使用が望まれるようになった。ハワイ人牧師の行うハワイ語礼拝に興味を失った信徒が教会を離れる可能性が指摘され、要望に応じて毎月特定の日曜日に英語礼拝を行うハワイ人教会も出てきた。ハワイ語しか解さない古い世代の信徒と英語による教会活動を望む若い世代の信徒の分断は、ハワイ人教会にとって難しい対応を迫られる問題であった。

ハワイ人の人口変動、他宗派の活動、移民の流入、伝統宗教の復興、使用言語の変化など、様々な社会的要因により、19 世紀の終わりにはハワイは会衆派にとってかつて夢見た「伝道王国」ではなくなっていた。それを決定づけたのが、ハワイが文字通り王国でなくなる 1893 年に起こった出来事である。